

(二〇一六年度)

## 4 国 語 問 題 (六〇分)

(この問題冊子は17ページ、三問である。)

### 受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいねいに消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

□  
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

共生ということが自分と異なる者とのあいだで追い求められようとするとするなら、共に生きていく相手との差異をどのように捉えるべきだろうか。もし、それを例えば、肌の色や体つき、あるいは言語や生活習慣が異なるといった、容易に観察しうる表徴の差異に還元するなら、「われわれ」と、この「われわれ」とは異質な者たちとの区別が固定され、両者が硬直したアイデンティティのうちに閉じ込められるばかりでなく、「われわれ」のあいだにある差異までもが覆い隠されてしまう。それはとりもなおさず、社会に内在する亀裂を隠蔽することにはかならない。このことが「共生」という語を空虚なイメージに変えながら、自分と異なる者と共に生きることを妨げているのだとするなら、まずはもつと身近なところにある差異へ目を向けるべきであろう。

例えば、たとえ家族や友人のようなきわめて近い隣人であつても、当然ながらけつして理解し尽くすことはできない。どれほど長く生活を共にしても、家族の未知の一面に気づくことはつねにありうるし、あるいは病床に横たわる友人の苦しむ姿にどれほど心が痛んだとしても、それは友人自身の病の苦しみを味わうことではない。それゆえ非常に親しい人であつても、自分と異なる以上、自分を投影して理解することは不可能なのだ。そのように、自分とけつして重なり合うことがないという意味で、自分と異なる者とは徹底的に非対称である。ここからは、この自分とは非対称な者を、「他者」と呼ぶことにしたい。そうすると、自分と異なるとはまず、このように自分と非対称であることであり、共生とはそのような他者と共に生きることであると言えよう。

さて、この他者について徹底的な思考を示すレヴィナスは、その『全体性と無限』のなかで、他者はその「顔」においてまさに「他者」として現われると述べている。ここで「顔」とは、人体の一部位としての顔面のことではなく、敢えてひと言で言うなら、真正面から向き合わせられる他者の姿である。その輪郭なき姿は、他者を特定の一面において捉えることをこれまで可能にしてきた、その他者についての手持ちの観念——例えば、役割や社会的類型のようなもの——を不断にはみ出していく。そ

のように自分と他者の非対称性を突きつける他者の「顔」は、レヴィナスによれば、他者自身を「高み」から顕現させてもいる。この「高み」という言い方が暗示しているのはまず、他者と同一の平面に立ちえないことである。他者を理解し尽くせないとは、他者と同じ立場を共有できないということなのだ。

自分が「ここ」にいるかぎり、他者のいる「そこ」に立つことはけつしてできない。しかもこのとき、「ここ」と「そこ」を媒介する共通項も存在しない。他者はけつして自分の同類ではなく、むしろ自分は他者と何も共有していないかもしれないのだ。たとえ同じ言語を共有しているかに見えても、ちよつとした言葉遣いをめぐって行き違いが生じるだけで、「母語」という見せかけの公分母が瓦解してしまう。あるいは、特定の人々によって定められた「人間」の概念が、「非人間」を生み出し、「非人間」と決めつけられた者たちの差別と収奪による支配を可能にできた植民地主義の歴史を顧みるならば、自分と他者を、「人間」の概念によってひと括りにすることさえもできないはずである。

このように、同一平面上で結びつくことを可能にする共通の公分母が存在しないという点で、自己と他者は、非対称であるばかりでなく、共約不可能でもある。自分と異なるとは、非対称にして共約不可能ということであり、共生とは、非対称にして共約不可能な他者と共に生きることなのである。では、そのような他者と共に生きるとは、より具体的にはどのような生の営みなのだろうか。

非対称的で共約不可能な他者と共に生きること、それは少なくとも生態系における生物どうしの「共棲」の観念から、またそのイメージにもとづいて構想される「自然の一部」としての調和的な「共生」の観念から区別されなければならない。なぜなら、こうした「共棲」ないし調和的「共生」の観念は、それぞれ異質であるはずの者たちを「自然」の名の下で同質化したうえで、「共棲」および「共生」を閉鎖系の安定として思い描くことによつて、結局は「異物」の排除を正当化してしまうのだから。だが、他者とはまさにこの「異物」でもありうる者のことではないか。そして、そのように異質な者と共に生きること抜きにして「共生」を語ることに意味があるのだろうか。

あるいは他者と共に生きるとは、多文化主義の下でしばしば語られる「多文化共生」とも区別されなければならない。「多

文化」を語ること自体が、ともすれば一枚岩の全体としての「単一文化」が多様にあると想定するものであり、そのことは、一つの文化そのものが、各々それ自体複数性を刻印されている複数の文化の交渉によって成り立っていることを忘却することでもある。そればかりか、このとき「多文化」を語りうる立場が「普遍性」を自称する「西洋」の特権的な立場であることも忘却されている。そして、そのような二重の忘却にもとづく「多文化」の「共生」の観念が広く浸透するなら、植民地主義を押し進めてきた西洋中心主義が形を変えて、しかも体よく浸透し、かつての植民地支配の遺制や、現在も続く植民地支配が美化されることにもなりかねない。しかし、非対称的で共約不可能な他者と共に生きる可能性は、「単一文化」なるものを想定し、その下に他者たちをひと括りにして支配してきた植民地主義的な他者への眼差しを内側から乗り越え、植民地支配の暴力を克服することによって、他者にまさに「他者」として出会い直すところからこそ開かれるはずだ。その意味で他者と共に生きることは、「多文化」の「共生」ではなく、むしろ「ポストコロニアル」と形容されるべき共生である。このポストコロニアルな他者との共生が、「グローバリゼーション」の渦中に生きる者の課題ではないだろうか。

ところで、レヴィナスによれば、他者に遭遇するとき、他者に対してまったく無関心でいることはできない。他者の苦しみを氣遣ったり、他者に手を差し伸べたりするのみならず、他者を無視したり、共同体から排除したりすることも含めて、何らかの応答をしないわけにはいかないのだ。他者の「顔」とはそれ自体、応答を迫る呼びかけなのである。ただし、他者の存在を無視したり、他者を排除したりすることは、他者からの呼びかけを黙殺して、その独自の存在を否認することである。他者と共に生きようとするならば、まず自分が出会った他者を「他者」であるがままに受け容れ、その呼びかけに応えなければならぬはずだ。このことはまた、自分自身の「応答可能性」として、出会った他者に対する「責任」を引き受けることでもあろう。この他者に対する責任にもとづいて、他者の特異な存在を肯定し、他者「と平和でいる」関係を築くことができるのではないか。

<sup>11</sup>このことが世界のうちに、何も共有していない者たちが共に生きる余地を切り開いていくのではないだろうか。

(柿木伸之「パット剥ギトッテシマッタ後の世界へ」より)



〔注〕レヴィナス：二十世紀フランスの哲学者（一九〇六―一九九五）。

ポストコロニアル：植民地主義以後。

問一 傍線部1で、「社会に内在する亀裂を隠蔽することにはかならない」と筆者が述べる理由として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 相手との差異が、肌の色や言語のように観察可能な表徴の差異に還元されてしまうから。
- b 異なった言語や生活習慣をもつ他者と「われわれ」との区別が固定されてしまうから。
- c 共通の言語や生活をもつ「われわれ」には差異がなく社会的に同一だと見なされるから。
- d 他者との区別に基づいて、「われわれ」自身のアイデンティティが固定されてしまうから。

問二 傍線部2で、「徹底的に非対称である」という筆者の主張の内容を示すものとして、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 他者は、自分がどれほど努力してもすべてを理解することができない。
- b 他者は、自分と重なり合う部分がまったくない点で異なる者である。
- c 他者は、自分にはまったく未知で理解できない部分がつねにありうる。
- d 他者は、自分自身の基準ではどうしても理解できない異なる者である。

問三 傍線部3の「他者の「顔」という語は本文中ではどのような意味をもつか、次の中から適切でないものを一つ選べ。

- a 非対称的で正面から見ても輪郭がわからないもの。
- b 特定の類型や立場をつねに逸脱してしまうもの。
- c 自分の観念ではどうにも理解を確定できないもの。
- d 自分とは共有できないあり方を突きつけてくるもの。

問四 傍線部4の「見せかけの公分母が瓦解してしまう」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 自分と他者と同類として共生できないことがわかる。
- b 自分と他者とは非対称性をもつことがはっきりする。
- c 自分と他者とは共有している言語に行き違いが生じる。
- d 自分と他者とは共約不可能であることが明らかになる。

問五 傍線部5の「閉鎖系の安定として思い描く」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 生態系の内部では、生物どうしが異質であることを認めあつて共存していると考える。
- b ちがった種類の生物であっても、自然においては同質的なものであると見なす。
- c 自然の中では、異物である非対称的で共約不可能な者たちが共存していると考える。
- d ちがった種類の生物を、ある生態系の内部では安定的に共存していると見なす。

問六 傍線部6で、「多文化共生」を筆者はどのようなものと考えているか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 多様性をもつ多文化については、普遍的に語りうるような特別な立場はないと考えているもの。
- b 複数の単一文化が存在することや、それを語る特権的な立場があることを前提としているもの。
- c 一つの文化とは、多文化の交渉によって成立した複合的なものであることを認めているもの。
- d 単一文化だけがあるのではなく、むしろ異なる多文化が併存していることを前提としているもの。

問七 傍線部7で、「植民地支配が美化される」と筆者が見なす理由として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a かつての植民地主義を招いた「多文化共生」を、二重の忘却が正当化してしまうことになるから。
- b 想定をまちがえると「多文化共生」が特権的な一つの文化による多文化の評価を招いてしまうから。
- c 他の個別的で多様な文化を調節しうる「西洋」文化の普遍性が当然なものとされるようになるから。
- d 文化というものが、複数の文化の交渉に基づいて成立するものであることを忘却してしまうから。

問八 傍線部8の「他者にまさに「他者」として出会い直す」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 植民地主義におちいる特権的見方を改めて、異質な他者を異質であると理解しつつ受け入れる。
- b これまでの多文化主義では忘れられてきたそれぞれの文化の特殊性を重視して、共生をはかる。
- c これまでの西洋中心主義から脱却して、植民地と見なされてきた複数の文化との交渉を始める。
- d 植民地主義のような暴力的な文化支配を超えて、異質な他者の文化と共存できる方法を見直す。

問九 傍線部9の「他者の「顔」とはそれ自体、応答を迫る呼びかけなのである」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a まったく異質なものはあるが、気遣いや無視などを含めた応答が可能であるような現れである。
- b 自分と同じ類の人間が現すものであり、どれほど異質であつても黙殺や排除はできないものである。
- c 非対称的で共約不可能な異物として遭遇するものだが、それでも共生せざるをえない人間である。
- d その独自の存在を無視したり黙殺してはならないような、自分が受け入れて共生すべき他者である。

問十 傍線部10の「責任」を引き受ける」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 他者は異者であるが、関心をもって応答せねばならないと考える。
- b 他者の独自の存在を肯定し、黙殺せずに受け入れられると考える。
- c 他者を応答できる相手と見なし、関心をもって気遣おうと考える。
- d 他者の無視や排除をしてはならず、受容せねばならないと考える。

問十一 傍線部11のように筆者が主張する理由として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 他者への眼差しを変革することで、植民地主義の暴力的思考を乗り越え、多文化共生の時代をもたらすことができるから。
- b 非対称的で共約不可能な他者にも責任をもって応答することで、はじめて平和的な共生が可能になると思われるから。
- c 社会に内在する亀裂を明るみに出すことによって、他者も自分も硬直したアイデンティティから解放されるから。
- d 生態系での調和的「共生」という閉鎖的な観念を打破して、異質な他者と共に生きる真の「共生」が実現できるから。



二

次は心敬の連歌論「ひとりごと」の一部である。これを読んで、後の問に答えよ。

まことの先達の句には、必ず云ひ捨てたるもの多かるべし。当座の粉骨を宗として、輪廻・前句の難句などには身<sup>1</sup>を捨てて人の句を助け侍る句多かるべし。古人の歌にも、つづりに錦を織り交ぜよといへり。さのみ選り句・選り歌にのみ心をとどめ侍らば、無念のことなり。好もしくめづらしき句どもを聞き知りて褒美するは諸人のうへにて、初心末座の人の、させる節なき句のうちにも、思ひ入れ恥づかしき句どもも交り侍るべくや。いかばかりの所までも心を付け、毎々句々に耳・心のとどきて聞き落とさざらん好士、まことの大切の人数と申すべくや。たしなみ修行おろそかにて劫のみ入りたる人の聞き知るべきにあらざるか。俊成卿の語り給へるは、「源俊頼はすべて歌を知らぬ好士なり。その故は、毎々座々に好もしく面白き歌ばかりを詠じ侍ればなり」とのたまひし。この詞、艶深く修行高きことなるか。さればとて、眠り目におだしくのみ歌を詠めとにはあるべからず。この境を悟り明らかめ侍らん好士、おぼろけにもありがたくこそ。

連歌は、おほかた歌をこころみ侍らでは、明らかには境に入りがたくや。歌の上下の続きさまの、心の転じ侍るを心得侍らでは、他人の疎句などの、手を放ちたる所などにたどり侍るべくや。連歌ばかりひとへに稽古の好士は、細工の小刀などにて家を作り侍るごとくなるべし。くだけ節くれ立ち侍るべきか。いかばかりの下手にても、番匠の造りたらんよろしかるべし。およそ堪能・不堪の人の句作れるさま、この歌にてことわり侍るべくや。

誰としても知らぬ別れのかなしきは松浦の沖をいづる舟人

この歌を不堪の人の作らば、「旅の別れのもろこしへ行く」などと云ひあらはし侍るべし。それは幽遠余情遅れ侍るべし。

かたへの好士たち、いかばかり拙き詞をも、代々集にあり、古人の本歌とて、用心なくあらあらしき事ども云ひ散らし侍る、いささか用捨あるべくや。代々集にも、えせ歌ども入り侍らではかなはぬならひなり。ことに上臈・権門たち、数を知らず入り給へば、その内によるしからぬ、なまなましく、あらあらしき歌も多かるべくや。古今集などさへ秀歌のみにはあらずといへり。いにしへより、代々つぎさまの歌ども入れ侍り。撰者の越度にはあるべからずとなり。又、証歌などには、いか

ばかりの歌どもも立つべくや。<sup>9</sup> 偏に学ばん事は、用捨なくては無念の事侍るべしと也。

〔注〕○輪廻 連歌で、一句を置いて同じ趣向の句が繰り返されるのを咎めた呼称 ○前句の難句 連歌で、次に句を続けるの

が難しい句 ○好士 ここでは連歌詠みを云う ○人数<sup>にんじゆ</sup> 連歌の座の参加者 ○俊成卿 藤原俊成(千載和歌集の編者)

○源俊頼 歌人(金葉和歌集の撰者) ○おだしく 生気なく ○歌をこころみ ここで「歌」は、連歌ではなく和歌のこと

○疎句 上の句と下の句に表面上の断絶があるもの ○番匠 大工 ○堪能・不堪 熟達した者・未熟者 ○誰としも

藤原隆信作の和歌(新古今和歌集・卷九・離別歌) ○かたへの好士 一部の連歌詠み ○代々集 代々の勅撰和歌集

○つぎさま 二流 ○証歌 作歌の参考とする歌

問一 傍線部1「身を捨てて人の句を助け侍る句多かるべし」の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a 他人の句を生かすために、自分の句を敢えて犠牲にする詠み方が多いのではないか。

b 他人の句を生かすために、自分の句を敢えて犠牲にする詠み方をすべきである。

c 他人が、敢えて犠牲になって、自分の句を生かしてくれる詠み方も多いのではないか。

d 他人が、敢えて犠牲になって、自分の句を生かそうとしたくなるような詠み方をすべきである。

問二 傍線部2「褒美するは諸人のうへ」の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a 賞讃は、実力が普通の人よりもある人がすべきことである。

b 普通の人々の事をこそ賞讃すべきである。

c 普通の人ではなく、実力のある人だけを賞讃すべきである。

d 賞讃するのは、普通の人にもできることである。

問三 傍線部3「劫のみ入りたる人」の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 技巧だけが勝れている人。
- b 個性だけが強い人。
- c 修行の期間だけ長い人。
- d 年齢だけ上の人。

問四 傍線部4 俊成の語を引用した意図は何か、もっとも適切なものを一つ選べ。

- a 佳句ばかりを連ねたのでは歌会が成功しないことを、高名な歌人である源俊頼への批判を挙げて示す。
- b 佳句だけを学ぶのでは歌を学んだことにならないことを、高名な歌人である源俊頼への俊成の評価によって示す。
- c 高名な歌人である源俊頼の才人ぶりを、佳句しか詠むことを知らないという一見非難のような言葉で示す。
- d 佳句ばかり詠むので座が白けてしまうという、冗談の形で実は源俊頼を賞讃した俊成の人柄を示す。

問五 傍線部5「おほろけにもありがたくこそ」の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 少しでもいるのであれば、感謝すべきである。
- b いたとしても少数で、ほとんどいないだろう。
- c はっきりとは分らないが、ほとんどいないだろう。
- d はっきりとは分らないが、感謝すべきである。

問六 傍線部6「細工の小刀などにて家を作り侍るごとく」が例えている内容としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 小刀は繊細な工作はできても家が作れないように、良いものでも、それだけでは通用しない場合がある。
- b 小刀だけを使って家を作ると処理できない素材が出てくるように、扱いかねる材料があると結果が良くない。
- c 小刀細工で作った小さな模型の家は繊細で洗練されているが、人生の縮図としての連歌も同様である。
- d 家の造作にも小刀の細かな加工が必要なように、大きな構造の中にも繊細な処理が必要である。

問七 傍線部7「旅の別れのもろこしへ行く」という句を「不堪の人」の句とする理由として、もっとも適切なものを一つ選べ。

- a 上の句は遠くから舟を眺める様子であるのに、下の句は乗船しての句で、遠くからのおぼろな視点を消しているから。
- b 上の句の「誰とも知らぬ」は、理由も又分らないと暗示するのに、下の句が理由を明示してしまい、矛盾しているから。
- c 上の句が敢えて抽象に留めたのに、下の句が説明的で、想像を固定してしまっており、味わいがなくなるから。
- d 上の句の「別れ」を下の句でも繰り返して過剰に強調したために、上の句のほのかな余情が壊れているから。

問八 傍線部8「撰者の越度にはあるべからずとなり。」と心敬が言う理由は何か、最も適切なものを一つ選べ。

- a 撰者の判断が後世の評価と食い違うのはやむを得ないことで、度を過ぎているとまでは言えないから。
- b 撰者がそこまで取捨選択を行なうのは、撰者の度を過ぎた編集で、越権行為であるから。
- c 歴代の勅撰集がそうであり、それらの撰者はそれぞれ異なるので、特定の撰者の失態とは言えないから。
- d 収めるのが秀歌・佳句ばかりではないのは、撰者の失態というより、むしろ編集方針の結果であるから。

問九 傍線部9「偏に学ばん事は、用捨なくては無念の事侍るべし」の意味としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a ひたすら勉強をして、劣った者には情けも掛けずに切り捨てるようでは、恨まれる事もあるであろう。
- b ひたすら真似ばかりをして、何の取捨選択もしないようでは、結果が思わしくない事もあるであろう。
- c かたよった勉強をして、適切な指導を受けないままだと、欠陥に気付かない事もあるであろう。
- d 表面的な真似ばかりで、本質にかかわる価値判断が欠けていると、思いがこもらない歌になるであろう。

問十 次の文学作品の中から、連歌に関連する作品としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 閑吟集
- b 宴曲集
- c 玉台新詠
- d 菟玖波集

問十一 次のの中から、心敬以降で連歌に関連する人物としてもっとも適切な人物を一人選べ。

- a 宗祇
- b 二条良基
- c 松尾芭蕉
- d 後陽成天皇



三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

周処年少時、兇彊俠氣、為郷里所患。又義興水中有蛟、山中有躡跡虎、並皆暴犯百姓。義興人謂為三横、而処尤劇。或説処殺虎斬蛟。実冀三横唯余其一。処即刺殺虎、又入水擊蛟。蛟或浮或

没行数十里、処与之俱經三日三夜。郷里皆謂已死、更相慶。竟

殺蛟而出、聞里人相慶、始知為人情所患、有自改意。乃入呉尋

二陸。平原不在、正見清河、具以情告。并云、欲自修改、而年已

蹉跎、終無所成。清河曰、古人貴朝聞夕死、況君前途尚可。且

人患志之不立、亦何憂令名不彰邪。処遂自改勵、終為忠臣孝

子。

〔注〕○周処：西晋の人。 ○兇彊：凶暴である。 ○義興：江蘇省南部の地名。 ○蛟：竜の一種であるが、ここでは水中に住む大蛇。 ○遭跡虎：あたりをうろつく虎。 ○二陸：西晋の陸機と陸雲。 兄の陸機は陸平原、弟の陸雲は陸清河とも呼ばれた。

問一 文中の波線X・Y・Zの意味を含む熟語として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- |   |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| X | a | 横断 | b | 横溢 | c | 横死 | d | 横暴 |
| Y | a | 事情 | b | 情事 | c | 人情 | d | 真情 |
| Z | a | 令状 | b | 仮令 | c | 令才 | d | 勅令 |

問二 傍線部1〔実冀三横唯余其二〕の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 実際は三横に頼んでその一つを除いてもらいたいと思った。
- b 本当は三横のうち一つが残るだけにしたいと願った。
- c たしかに三横がただ一つの持て余しものだと思った。
- d やはり三横の中の一つのものを手に入れたいと思った。

問三 傍線部2「蛟或浮或没行数十里処与之俱経三日三夜」の文章に句読点を施したものととして、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 蛟或浮、或没行、数十里、処与之俱、経三日三夜。
- b 蛟或浮或没行、数十里処、与之俱、経三日三夜。
- c 蛟或浮或没、行数十里、処与之俱、経三日三夜。
- d 蛟或浮或没、行数十里処、与之俱経三日三夜。
- e 蛟或浮或、没行数十里、処与之、俱経三日三夜。

問四 傍線部3「有自改意」とあるが、そう考えた理由としてもつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 郷里の人が自分をほめてくれたが、それは本心からではないとわかったから。
- b 郷里の人が自分のことをうらやんでいることを知って、うんざりしたから。
- c 郷里の人が自分の失敗を喜んでいると耳にして、人情のあさはかさが嫌になったから。
- d 郷里の人から自分が、死ねばよいと思われる程に嫌われていることがわかったから。

問五 傍線部4「年已蹉跎」の意味として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 年齢的に時期を失ってしまった。
- b 年齢的に中途半端に終わった。
- c 年齢ゆえの失意を味わった。
- d 年齢はもう関係しない。

問六 傍線部5「朝聞夕死」は、『論語』中の「朝聞道、夕死可矣」という文章を踏まえている。このことを考慮に入れて以下の各問に答えよ。

① 『論語』の文章「朝聞道、夕死可矣」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 朝に真実の道を聞いて悟ることができれば、その夕方に死んでも本望である。

b 朝に正しい道のりを聞き知れば、その夕方には死ぬべきである。

c 朝に有為の道を体得して、その夕方に死ぬことは無駄がなくてよろしい。

d 朝にまっとうな道を教わってこそ、夕方に死を迎えることができる。

② 傍線部5「朝聞夕死」の文中における意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 朝に知ったことが夕方には失われてしまうような移り変わりの早い世の中であるから、ますます寸暇を惜しむべきである。

b 正しい道を体得することが重要なのであって、それをいつ体得するかという時期については問題とならない。

c 朝夕のような短い時間に真理を悟ることは難しいので、今すぐに学びはじめるべきである。

d 死ぬ気で勉学に励めば何事でも成し遂げられるのであるから、学ぶことをためらってはならない。







